

「唯識」という生き方(2)

横山 紘一



横山 紘一 / よこやま・こういつ

1940年、福岡県生まれ。70年、東京大学大学院印度哲学科修了。現在、立教大学教授。著書に、『唯識の哲学』『唯識とはなにか』『唯識』という生き方』『唯識・わが心の構造』『十年図・自己発見への旅』など。

「唯識」という仏教の思想を聞いたことのある方は、本誌の読者の中にはほとんどおられないと思いますが、この思想は、インド大乘仏教の第二期のもので、7世紀、あの小説『西遊記』の主人公で有名な三蔵法師玄奘によって17年の長きにわたるインドへの求法の旅の末、中国に伝えられ、それが奈良時代に日本に伝来し、以後現代にまで脈々と学ばれつづけてきた仏教の基本学です。

その唯識思想が昨年、日本でにわかに脚光を浴び始めてきましたが、唯識ブームの到来は私にとってはそれほど驚いた出来事ではありません。なぜなら唯識は仏教を超えてまさに21世紀にふさわしい、世界に通用する普遍的な思想であり、それは単に知的対象としての教理であるだけではなく、人間が迷うことなく生きていくための人生の指針となる思想であると私は固く信じていたからです。

ここで「唯識」の基本的教理を2、3紹介し、それに基づいて私たちはどのように道を誤ることなく生きていくことができるかを考えてみたいと思います。

1. 唯識無境

「唯識無境」とは、唯だ識すなわち心しか存在しなく、外界には事物は存在しないという教理です。

例えば、ここに3人の人がいて、共通の1本の松の木を見ています。しかしこれはあくまでも億測であって、間違っているのです。なぜなら私たち一人一人はそれぞれの心という宇宙の中に閉じ込められた存在であるからです。私たちは決して「自分の外」に抜け出して自分を外から眺めることはできないのです。だから私が見ている1本の木は、私の心の中の「影像」（観念とも言うことができます）であるのです。だから3人いれば3本の木があることになるのです。一步譲って松の木は外にあるかもしれないとしましょう。でも私は私の外に抜け出ることができないのですから、私はそれを直に見ることも触れることもできません。繰り返し申しますが、本当に一人一宇宙であってその閉じ込められた宇宙の中で右往左往しているのです。

この一人一宇宙を唯識の用語で「人人唯識」と言います。一人一人の世界、宇宙は、各人の深層の心（それを阿頼耶識と言います）が作り出したものであるという考えです。これは唯識の教理ではあるのですが、これまで述べてきたように静かに考え観察すれば、だれし

もが認めざるを得ない事実です。私はまず、すべての人がこの「一人一宇宙」という事実を事実として認めようではないかと最近強く訴えています。なぜならこの事実気づくならば、その人の生き方が違ってくるからです。

例えば「憎い人」という認識を考えてみましょう。私たちは普通、自分を離れて「憎い人」が眼の前にいると考え、その人を憎みます。だから「そこに憎い人がいるから憎いという気持が起こるのだ」と考えます。でもここで静かな心で考え直してみましょう。もしも私の心の中に憎い気持が生じなければ、決して眼の前に「憎い人」という存在は現れてきません。すなわち私の側にある憎い「気持」と、そしてもっと厳密に言えば、憎いという「言葉」とが「憎い人」を作り上げているのです。この因果関係、因果法則を唯識では、「縁起の理」と言います。これは、

Aが有ればBが有り、

Aが無ければBは無い。

という簡単な法則です。いま挙げた「憎い人」について言えば、

憎いという「気持」と「言葉」が有れば「憎い人」が有り、

憎いという「気持」と「言葉」が無ければ「憎い人」は無い。

ということになります。

だから私たちは、なかなか難しいことですが、勇気をもってこの簡単な因果法則すなわち縁起の理に即して自己の心の中から憎む気持を無くすよう努力してみようではありませんか。そのように努力しようとする人が増えれば増えるほど、社会は浄化されていくことでしょう。

いま「憎い人」を作り上げていく要因として気持に加えて言葉をも挙げましたが、この「言葉」の働きに注目し、それがいかに迷いの世界を現出せしめているか説き示したのが「唯識」、広くは仏教であります。「唯識」は、「唯だ識しか存在しない」という意味ですが、換言すれば、

「すべての存在は言葉が作り出したものにすぎない」

という主張でもあるのです。すべての存在をいま分かりやすく「自分」と「もの」という2つの表現を用いて分類することにします。このうち「自分」とは、私、自己、俺、などと言っているものです。

そこでまず「自分」というものは存在しない、それは言葉が作り上げたものにすぎないという「唯識」の教理を考えてみましょう。

ここ数年、私は、ことあるごとに人と次のような問答を行っています。
まず、

「手を見てください。それはだれの手ですか」

と問うと、必ず質問された人は、

「自分の手です」

と答えられます。そのときさかさず

「では手は眼で見えますが、いまあなたが言った“自分”という言葉に対応するものがあるでしょうか。静かに観察してみてください」と再び問いかけます。そこで相手は考え始めます。しかし相手は困った顔をするだけで答えは返ってきません。なぜならその“自分”という言葉が指し示すものを決して発見できないからです。

そうです。“自分”というのは言葉の響きがあるだけなのです。その響きに惑わされて存在しない自分を単純に存在するものと考え、しかもすべての行動の主体として真ん中に据えて、「自分が、私が、俺が - 」と主張するのです。

このように唯だ言葉の響きがあるだけで「自分」といったものは存在しないという事実を、仏教は無我すなわち「我は無い」と表現します。このように自分が存在しないということに気づいたら、もう「自分」や「自分のもの」という判断を止めようではないかと私は最近私自身に言い聞かせ、同時に他人にもそれを訴えています。

肉体に対しても同じことが言えます。例えば食事を摂るとき、「自分」とはなにかを考えてみると、そのときこそ自分とは「生かされてある存在である」と気づくことができる絶好のチャンスです。例えばマグロのトロ口を食べるとします。そしてそのトロの味に意識を集中して、その味に成りきって味わってみましょう。そのとき、この一つの味が味わえるまでの過程に思いをはせるなら、そこに感謝の気持が湧いてきます。なぜなら、この美味しいトロの味を味わえることができるためには、もう数え切れないほどの縁が働いているからです。この刺身を作ってくれた料理人、その魚を捕ってくれた漁師、マグロそのもの、そのマグロを育ててくれた海、はるか何十億年前にこの地球に生じた命の一滴、地球、太陽、そして宇宙の果ての存在にまで因果の鎖を遡ることができます。それら一つがもしも無かったならば、この美味しいマグロの味を味わうことができないのです。さらに自分の肉体に眼を転じてみましょう。舌があり神経があり、ないしは60兆の

細胞が協同的に働いてこの味を味わうことができるのです。

このように「自己以外の数え切れないほどの他の力によって支えられ助けられて生きている自分」、これは事実です。「自己以外の他の力」と言いましたが、有るのはこの他の力だけです。この事実に気づき、それを知る智慧が増大すればするほど「自己」はどんどん小さくなっていき、とうとうゼロになってしまうのではないのでしょうか。

この事実を仏教は、「縁起の故に無我である」と説きます。前述した「縁起の理」に即してこのように「自分」を観察していくと、大きく生き方が変わってきます。それまでの「自分への執われ」が薄らいで、より自由に生きることができるようになります。

「自分」への執われに加えて、私たちにはもう一つ「もの」への執われがあり、それによって迷い苦しみ、ときには罪悪までも犯してしまいます。この「もの」には自分の肉体からはじまって身の回りの事物、自然、宇宙、さらに宗教で言う「神」までも意味することになります。

「唯識」はそのようなものへの執われを「唯識無境」、すなわち、唯だ識すなわち心しかなく、「もの」は外界には存在しない、という教理でもって一刀のもとに切り捨ててしまいます。

いま「もの」として分かりやすい「自然」を例にとって考えてみます。例えば私が眼前に見る山は普通私の外に存在すると思われていますが、すでに述べましたように、私が見ている「山」は私の心の中にある影像であって、決してその影像を他人が見ることはできません。前の「自分」のときと同様、やはり言葉が「もの」を作り出してしまうのです。もちろん自然は外界にあると考えてもよい。しかし人間は「知識は力なり」という命題のもと、その知識とそれに基づく技術とで自然を征服し、現に見る地球環境破壊を引き起こしてしまったのです。いまその反動として「自然にやさしく」とか「自然と共生を」と叫ばれています。しかしそのように叫ぶ前に、人間同士が言葉によって捉えた「自然」ではなく、一人一人の心の中にある生の“自然”を、否、「自然」と名づけられる以前の「生のもの」影像として存在を静かにじっくりと感じ観察し、その上でみんなに共通の「自然」と調和して生きていくにはどうしたらよいかという問題を考えていくことが大切であると思います。何事に対しても、先ずは「思い」と「言葉」とを離れて、心の中で「それそのもの」に成りきることが肝要です。